海晉半二
山雲宗輔

傑作集

全

緒言

元祿の頃大坂に操座二つあり、竹本義太夫の竹本座、豐竹越前少掾の豐竹座是なり。而して竹本座付の作者には近松門左衞門あり、豐竹座には紀海音ありて、盛に新作を出し、脚色の巧と行文の妙を競ひて互に相頡頏せり。近松の後を承くるものを竹田出雲とし、出雲に次ぐものを文耕堂、三好松洛、近松半二等とす。海音の後には西澤一鳳、並木宗輔、淺田一鳥の諸家あり、各〻文鋒を磨き趣向を凝せり。其内近松を除きて、尤も有名なるは、海音出雲宗輔半二是なり。今此四氏の傑作と認むるもの、九篇を擇びて本集に收めぬ。其文近松に及ばずと雖も、脚色變化の妙を極めて感興を惹くこと多く、隨つて其の生命の斯界に不朽にして今猶寄席に操に國民の感情を支

配しつゝあるは、人の知る所なり。近松海音は其の作に獨自一己の力に成れども、出雲宗輔の時より、衆智を集めて一篇を作成する例を闢けり。卽ち一の作を出さんとするに、豫め一篇を數齣に分ち、立作者卽主住者より幾人の作者に配當して文を綴らしめ、各自作り了れば、一席に持ち集りて會讀し、互に論難改竄して以て完璧のものとなす。當時丸本の末に、主任者の名を筆頭として、數名の連署あるは是が爲なり。

今本集に收めたる九種の篇名及びその初めて登場せる年月、作者の氏名を擧ぐれば左の如し。

菅原傳授手習鑑（十行本）延享三年　竹田出雲、三好松洛、並木千柳

義經千本櫻（七行本）同　四年　同

假名手本忠臣藏（七行本）寛延元年八月十四日　同

關取千兩幟（七行本）明和四年八月四日　近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出、八民平七、竹本三郎兵衛

妹脊山婦女庭訓（七行本）同　八年正月廿八日　近松半二、松田ばく、後見三好松洛、柔善平、近松東南、

伊賀越道中雙六（七行本）天明三年四月廿七日　近松半二、近松加作

八百屋お七（九行本）寶永元年　海音

心中二つ腹帶（十行本）享保七年　同

一谷嫩軍記（十行本）寶曆元年　並木宗輔、淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三蹊、豐竹甚六

右題目の下の括弧内は、校正の原據とせる丸本の種類を示したるものにして、本文は一に之に隨ひて嚴密に校訂し、漢字送假名等もつとめて舊體を存せり。但假名の多き所に聊か漢字を配し鈎識を施して地の文と詞を

區別し、難解の語句に頭註を施したるは校訂者の新に筆を加へたる所なり。

大正三年六月

校訂者　忠見慶造

出雲半二 海音宗輔 淨瑠璃傑作集 目錄

菅原傳授手習鑑 一―一〇二

第一……一
第二……二七
道行詞の甘春……二七
第三……五三
第四……七五
第五……九八

大物船矢倉吉野花矢倉義經千本櫻 一〇三―二〇六

第一……一〇三
第二……一二五
第三……一四八
第四……一七五
道行初音旅……一七五
第五……二〇二

假名手本忠臣藏 二〇七―三〇六

第一……二〇七
第二……二一一
第三……二一八
第四……二二九
第五……二三七
第六……二四三
第七……二五六
第八……二七〇
道行旅路の嫁入……二七〇
第九……二七二
第十……二八六
第十一……二九九

關取千兩幟　勝負附　貳枚續　三〇七——三七三
第一……三〇七
第二……三二四
第三……三三四
第四……三三七
第五……三四八
第六……三五二
第七……三六一
第八……三七二
第九……三七三
十三鐘絹懸柳　妹脊山婦女庭訓　三七五——四七六
第一……三七五
第二……三九八
第三……四二〇
第四……四四三
道行戀のおだまき……四五二
第五……四七四
伊賀越道中雙六　四七四——五八二
第一　鶴が岡の段……四七七
第二　行家屋敷の段……四八三
第三　圓覺寺の段……四九一
第四　郡山宮居の段……五〇二
第五　郡山屋鋪の段……五〇九
第六　沼津の段……五二四
第七　關所の段……五三八
第八　岡崎の段……五四六
第九　伏見の段……五六八
第十　敵討の段……五七九

八百屋お七　五八三——六一六
上之卷……五八三
中之卷……五九九
下之卷……六〇九
八百屋お七江戸櫻……六一三
心中二ツ腹帶　六一七——六五六
第一……六一七
第二……六二八
第三……六三六
道行ほしのかず……六四八
一谷嫩軍記　六五七——七五四
第一……六五七
第二……六七六
第三……六九九
第四……七一七
道行花の追風……七二七
第五……七四九